

駅員さんのいる風景

首藤 静夫

先日、NHKで「静かに広がる硬券ブーム」が取り上げられていた。鉄道ファンや旅行ファンの間で人気だそうだ。硬券とは厚紙で作られた0.7mmほどの硬い切符のことで、シニア世代は誰でも知っている。一部のローカル線では今も使われているとか。

数時間に一本しか通らない地方の小駅。子供の頃、たまに手にする硬券は重みがあった。

列車到着の十分前くらいになると、駅員さんが改札口に現れる。「お待ちせしました。大分行き十時三二分発の上りの改札を行います」と告げ、改札口を開く。

少ない乗客がベンチから立ち上がって改札を受ける。駅員さんは、乗客の切符を受取り、いちいち中身をじつと見る。そしておもむろに切符の真ん中あたりに鋏を入れて返してくれる。上下を逆さまに出すと、ご丁寧にも回して下部に鋏を入れる。高倉健の「鉄道員」^{ぼっぼや}ほどではないが、何となく厳粛だった。まさに改札だった。

昭和四十年代初めの渋谷駅。切符売場の駅員さんは忙しい。何百と並ぶ駅名から手早く行先の切符を抜き出してくる。客の支払いがもた

つくと指で卓を小刻みに叩いて待つ。体内リズムがそうさせるのか。

軟券に切り替わった時期は定かでないが、その頼りなく薄いこと、取り落としたらヒラヒラ逃げられそうだ。

しかし、そのおかげで改札のスピードが早くなった。押し寄せる乗客に切符の中身を改める暇はない。機械的に連続的に鋏を繰り出す。切りクズで鋏が目詰まりを起こすので、穴戸錠の拳銃さばきのように鋏を一回転させてクズを除去する。切られた切符は鋏が浅かったり、端っこだったりまちまちだった。客の持っている切符に鋏の方が飛んできて切られることもあった。凄腕だった。

地方出の少年は都会のスピードに戸惑いながらも徐々に慣らされていった。あれから半世紀。軟券さえ滅多に手にしない、切符のことで駅員さんに接する機会もない、諸事自動的に進んでいく。

切符を扱う駅員さんの姿は硬券も軟券もそれぞれに懐かしい。